



「患難さえも喜んでいきます」(ローマ5:3) この「喜ぶ」ということばは、もともと「誇りに思う」という意味があるといひます。患難の中で、最初は何も見えなくなって右往左往することがあつても、じつともちこたえながら、その中で神のみこころを探り続ける経験……。それはとてもつらいけれども、靈的な忍耐を生み出させるでしょう。そして、「忍耐」は「練られた品性」を生み出します。「練られた品性」とは、もともと「試験済みの品質」という意味のことばです。忍耐を経て、本当に真のキリスト者であることが証明されるということです。患難は、試金石として私たちを二分し、本当の信仰か否かをはっきりさせるのです。

「この希望は失望に終わることがありません。」(ローマ5:5) なぜでしょうか。唯一の絶対の根拠は、「神の愛」です。神の愛が私たちの心に注がれているからです。悲しみは悲しみであり、痛みは痛みです。けれども、その悲しみと痛みのただ中であつて、信仰者は、神の愛があふれるほど注がれていることを発見するのです。たとえ何を奪われる患難の中にあつても、いえ患難の中にあればこそ、決して奪われることのない根源的な喜びが、はっきり見えてくるのではないかと考えさせられるのです。「悲しみ」と「喜び」は、相反するものでありながら、事実、信仰者の心の中に同時に共存しうものなのだ、気づかされます。

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」(ローマ8:39) 神は、愛してくださっています。たとえどんな苦しみの時でも、それは決して変わることはないのです。耐え難い苦しみの中で、この神の愛を信ずることが出来ますように……。そして、神の愛によって与えられる救いが、どれほど確かで、揺るぎない希望に満ちたものであるかを、ますます実感することが出来ますように……。

「彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。」(詩84:6) 愛の神が与えてくださる慰めと希望は、まさにこんこんと湧き出る泉のようです。涙の谷で、喜びの泉を発見する感動を、共に味わわせていただきたいと願ひます。